2007 Good Practice

平成19年度文部科学省
大学教育改革支援プログラム実施報告書

ひとに優しい大学をめざして

公立大学法人
山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

個性輝く大学へ

大学の総力を結集しよう

―大学教育支援プログラムの充実に向けて―

山口県立大学理事長（学長）
江里 健輔

平成20年2月8日に開かれた中央教育審議会教育振興基本計画特別部会（部会長：三村明夫・新日鐵代表取締役社長）は、今後10年間を通じて目指す教育の姿として、“社会を支え発展させるとともに、国際社会をリードする人材を育てる”を示しています。

現在、日本の学生一人あたりの教育費はアメリカにはるかに及びませんが、2025年には現在のアメリカ並みに予算化することが目標にされています。教育費のアップがただちに高等教育における質の向上には繋がらないでしょうが、必要条件であることには間違いありません。

GP（Good Practice）は教育力アップのため、文部科学省が「優れた教育への取組」に対し、財政支援を行うものであります。本学は平成19年度特色GP、現代GP等に対し、5題が採択され、財政支援を受けることができました。これは華やかではありませんが、長年の地道な教育・研究の成果が高く評価された証しであり、嬉しい限りです。しかし、問題はこれらのプロジェクトを如何に達成するかであり、本学に真価が問われることになります。

採択された5題はいずれも“社会を支え発展させるとともに、国際社会をリードする人材を育てる”にふさわしいプロジェクトであり、達成の暁には“個性輝く大学へ”近づいていることでしょう。

この度、採択後1年という節目で、実施報告書を発刊することになりました。まだまだ完成の域ではありませんが、大学の総力を結集することで、最終的にはきっと充実した結果がもたらされることになるでしょう。

山口県立大学の概要

■沿　革

山口県立大学は、1941年に「山口県立女子専門学校」として発足し、1950年山口女子短期大学、1978年山口女子大学、1997年山口県立大学、2006年4月からは公立大学法人山口県立大学として地域と共に成長している。2007年4月より、全学共通教育の運営主体となる共通教育機構及び国際文化学部、社会福祉学部、看護栄養学部の3学部を設置し責任ある教育を開始し、さらなる躍進を続けているところである。なお、2007年4月1日付けで大学基準協会の基準に適合していることが認定された。

■教育理念と特色

本学の教育の基本理念は、人間尊重の精神、生活者の視点の重視、地域との共生、国際化への対応、の4点である。特に本学の位置する山口県は、急激な少子高齢化に伴う縮小型社会への対応を地域課題として抱えている。本学はこの課題解決に向けて、生命と生活の質を探求しつつ、生活者一人ひとりが健康で文化的に暮らせる対人支援を行う人材育成を目指している。「ひとに優しい」大学として、全ての学生が「自己へのケア」、「他者へのケア」ができると共に、生活を取巻く環境に配慮し行動できる「地球へのケア」の能力を培うため2006年9月には、国公立初のエコアクション21（EA21）認証を取得し、学生と教職員が一体となった管理・運営組織を確立した。

また、地域貢献型の大学として、地域共生センターを中心とした、地元産業との共同研究開発、県民対象の公開講座や高等学校への出前講義、県内7箇所のサテライトキャンパスでの知と技術の発信、社会参加活動に注目した生涯現役社会づくりを実現するための調査研究、支援活動を行っている。さらに、アジア、北米、ヨーロッパに姉妹校の大学と学術交流協定を結び、学生・教員間の交流を通して、異文化理解、国際感覚の涵養に努めている。

平成19年度文部科学省

大学教育改革支援プログラム

Support For University Education Reform Program

特色GP

「特色ある大学教育支援プログラム」は、大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものを選定、公表することにより、わが国高等教育の活性化を促進させることを目的として、平成15年度から実施された文部科学省の事業です。

平成19年度は331件の申請があり、52件が採択されました。本学が採択された「教育方法の工夫改善を主とする取組」の部門（4年制）では、全国で14大学が採択されました。

平成19年度文部科学省「特色ある教育支援プログラム」採択

「重層的学生支援教育」による福祉人材養成
～学生の成長課題と専門教育課題の有機的結合による福祉的人間力獲得をめざして～

取組の概要

本学部の教育目標は、**福祉専門職**である社会福祉士（ソーシャルワーカー）養成である。

福祉専門職の専門性の基盤としては人間的成熟が不可欠であるが、近年の学生の一般的な傾向として社会性・主体性の脆弱化、あるいはモラトリアムの長期化が認められる。

そこで本学部では、各学年に配置された**＜演習＞**の授業に**チュートリアル**機能を付加して学部教育の基軸に据えるとともに、学年主任・副主任や学生委員、教務委員、就職対策委員、障害学生対策委員、学部学生相談員等が学科長を中心に＜学部教務会議＞を組織し、専門実習教育を担当する＜実習会議＞と連携して、**チームアプローチ**によって重層的な教育支援を行っている。

その結果、社会福祉への**動機付け**を強め、国家試験合格率の上昇や福祉専門職への高い就職率を果たしている。また、在学生・卒業生からの評価も、本学部における＜人との出会い＞についての満足度が高くなっている。

現代GP

「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」は、社会的要請の強い課題に対応したテーマに対し、特に優れた教育プロジェクト（取組）を選定・公表することにより、これからの時代を担う優れた人材の養成を推進することを目的として、平成16年から実施された文部科学省の事業です。平成19年度は全体で600件の申請があり、119件が採択されました。

以下の6つのテーマのうち、本学はテーマ1、4の2件採択されました。

1.地域活性化への貢献（地元型）　2.地域活性化への貢献（広域型）　3.知的財産・コンテンツ関連教育の推進
4.持続可能な社会につながる環境教育の推進　5.実践的総合キャリア教育の推進　6.教育効果向上のためのICT活用教育の推進

平成19年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」採択

テーマ1　地域活性化への貢献（地元型）

やまぐち多世代交流・地域共生授業の展開
～山口市の都市部と田園部におけるワークショップ型授業による団塊世代と若者の定住促進～

取組の概要

存在感のある「地域貢献型大学」へ。これが法人化後の山口県立大学の目標である。1市4町が合併した山口市の都市部と田園部は、それぞれに異なる魅力と悩みをもっているが、山口県立大学では、その魅力の発見と悩みの解決をめざす住民主体のワークショップやフィールドワークに学生たちを送る**多世代交流・地域共生授業**を開始した。このボランティア経験に基づいて、ともに汗を流し智恵を絞る中で**地域の魅力**に深く触れ、地域の悩みの主体的な解決に携わらせる「**地域づくり達人塾**」方式を共通教育・学部教育で実施し、さらに地域リーダーが学生および地域参加者として多く集う大学院での**地域共生授業**につなげる。徳地町（現山口市）と県立大学との包括的提携を山口市全体に広げる予定であり、野田学園高校との包括的提携も生かして、地域・高校・大学・大学院が連携して、第二の故郷の魅力との出会いと、団塊世代と大学卒業者の地域定住促進を目指すモデル事業。

平成19年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」採択

テーマ4　持続可能な社会につながる環境教育の推進

持続可能な社会に繋がる人的財産の育成
～新生活スタートから持続可能な生活基盤づくりを支援する実践的環境・健康教育～

取組の概要

「ひとに優しい大学」を目指して、本学では「自己へのケア」、「他者へのケア」ができる人材育成を目標としている。その基盤に「地球へのケア」を嗜として身につけることが次世代を担う人材に必須の現代的教養と捉えた。環境や健康に対する配慮は継続的に取組むことが肝要であるため、日々の生活の中で環境と健康に配慮し、健全で健康的な生活基盤作りをし、環境に対する専門的学習を支援する教育プログラムを開発する。

本取組は、次の2つの教育課程から構成される。

①**生活基盤形成**時に学習習慣と共にCSRの意義を理解し段階的に生活習慣を身につける画期的な**実践的環境教育**及び**実践的健康教育**としての導入教育。

②専門的知識や実践力を培う教育課程として専門水準が担保された、**副専攻「環境システム」**の創設。

これらを通して持続可能な社会に繋がる人的財産の育成を行う。

本取組は、地域の持続的環境改善や、**社会的責任**を果たせる人材育成としてのモデル的事業。

Good Practice=GP

GPとは文部科学省がその取組を評価し、選定、支援する「優れた教育への取組」をいいます。山口県立大学は地方小規模大学のメリットを活かした、地道で丁寧な組織的教育力が高く評価され、平成19年度特色GP、現代GP、社会人の学びなおしGP、学生支援GPのすべてに採択されました。

http://blog.ypu.jp/gp/

文部科学省が支援する多角的大学教育改革

「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」は学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成するため、各大学・短期大学・高等専門学校における、入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援のプログラムのうち、学生の視点に立った独自の工夫や努力により特段の効果の上がっている取組を含む優れたプログラムを選定し、広く社会に情報提供するなど、各大学等における学生支援機能の充実を図るため、平成19年度から文部科学省が実施している事業です。本年度は272件の申請があり、70件が採択されました。

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gakusei.htm

平成19年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」採択

総合的人間関係力を涵養する学生支援
～大学と地域で作るプレ社会における実践的トレーニング～

取組の概要

本プログラムは、昨今の大学生の人と関わる力の低下を学生個々の能力の低下ではなく、生活経験や社会体験の不足から来るものと考え、学生支援の観点からその経験を補っていくことを目的としている。大学及びそれを取り巻く地域社会を現実の社会の前段階である**プレ社会**ととらえ、この**プレ社会**において、学生が大学や地域社会の要請に応えて様々な取組を行うことによって、学生同士は言うまでもなく世代や職種の異なる多くの人々と関わり、体験を通じて**自主・自立**の精神を養い、**総合的人間関係力**を身につけることが狙いである。これらの取組は、学生を大学のゲストではなくスタッフとしてとらえる**ジュニアTA制度**によって支えられる。特に、本学の校是「地域社会との共生」の実現のため、大学内に専門のコーディネート機関を設置して積極的に**地域との連携**をはかることにより、地域社会にも活力を与えるという双方向性を持つ。

「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」は各大学、短期大学、高等専門学校における教育研究資源を活用し、社会人の学び直しニーズに対応した教育プログラムを展開する優れた取組を支援するため、平成19年度から新規に「大学・専修学校等における再チャレンジ支援推進プラン」のひとつとして実施している文部科学省の事業です。

平成19年度は315件の申請があり126件採択されました。本学が申請した医療系には56件の申請があり23件が採択されました。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/07/07072304/002.htm

平成19年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」採択

行動変容を促進する栄養指導法を身に付ける栄養士キャリアアップ支援プログラムの開発

取組の概要

メタボリックシンドロームを予防するために、食習慣や運動習慣など生活習慣の改善につながる効果的な栄養指導を行うことができる管理栄養士の育成が求められている。

本事業は、**現職の管理栄養士**を対象として、行動変容を促進する栄養指導を行うために必要な実践的な能力を身に付ける教育プログラムを開発し、**山口県栄養士会、山口市、山口県と連携**して**栄養士キャリアアップ研修**を実施するものである。

本研修は講義、実習、演習で構成され、6カ月（2時間×15回）で修了する。実習は、本学が実施する「**山口県立大学（YPU）すこやかライフセミナー**」（地域住民を対象として、自分の体と習慣を知り、すこやかに暮らすための技を身に付けるセミナー形式の学習会）に管理栄養士として参加することによって行う。研修修了時、一定の基準に到達した者について、大学は履習証明を発行する。

本研修を受講した者は、保健指導対象者の病態や栄養評価に基づいて個別行動計画を提案する能力を身に付け、受講後はそれぞれの職域において、生活習慣改善のための取組を支援するセミナーを企画・運営することにより、地域の保健指導において中心的役割を果たす人材となる。

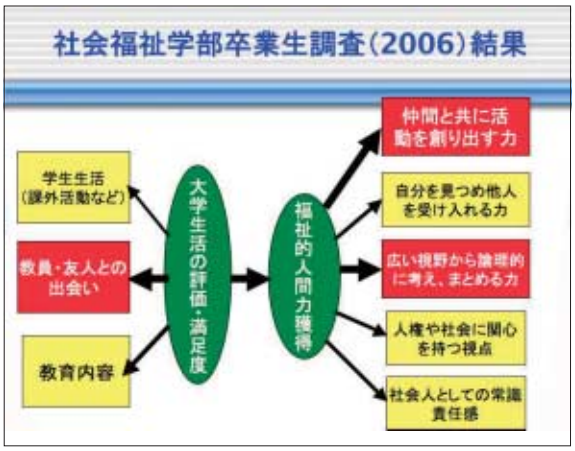
重層的学生支援教育による福祉人材養成

～学生の成長課題と専門教育課題の有機的結合による福祉的人間力獲得をめざして～

人との出会いによる＜福祉的人間力＞の獲得

実践力のあるソーシャルワーカーになるには、「福祉の専門職能」（福祉倫理・専門知識・専門技術）の基盤となる＜福祉的人間力＞を身につけることが必要です。

2006年に実施した「卒業生調査」によると、本学部卒業生は、本学の大学生活について、「教育内容」「学生生活」とともに「教員・友人との出会い」に高い満足度を示しています。さらに、こういった大学時代における人との出会いが、学生個人の＜福祉的人間力＞獲得に大きく影響していることがわかりました。

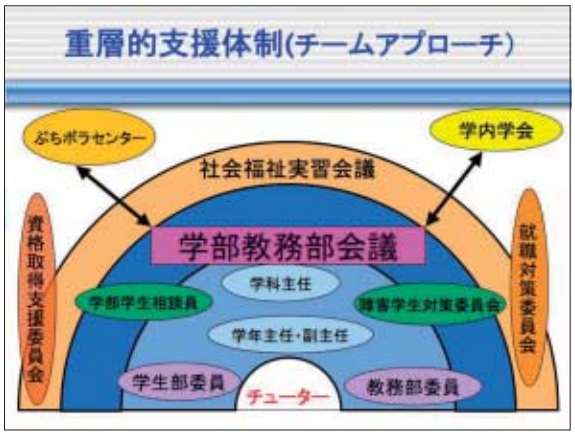


社会福祉学部教育の特色

1.「演習」を核としたきめ細かい教育支援

1年から4年まで、原則として10人以下の少人数グループによる「演習」を配置しています。

「演習」の授業に「チュートリアル機能」を付加しています。一般にチュートリアル教育とは、少人数で構成された学生のグループにある課題が与えられ、学生がその課題を検討し、思考を重ねながら掘り下げていき、解決していく教育方法を言いますが、本学における「チュートリアル」とは、その教育手法に加えて、入学当初の大学生活への適応から卒業後の進路相談に至るまでの、様々な学生の成長課題に即した個別相談援助をも加味して実施していることに特徴があります。



2.学生の成長を支援する教員のチームワーク

「演習担当者」のチュートリアル機能を支えるために、通常の教務委員、学生委員の他に、学部学生相談室、学部就職対策委員会、資格取得支援委員会、障害学生支援委員会、その他各種の「課題別教育支援チーム」を組織しています。これらの教育支援チームは、「学部教務会議」を中心に連携をとりながら、重層的なチームアプローチで教育支援活動を行っています。

3.「理論」と「体験」を結びつける演習

「演習」の授業では、「地域社会体験」や「実習体験」を活用した授業展開を行い、理論学習と体験学習の統合化に努めています。学生は1年次の「ボランティア」からはじまり、2年次の「社会福祉援助技術演習（プログラム企画演習）」では地域の福祉活動団体との協働プログラムに参加し、3～4年次では社会福祉機関や施設に配属され社会福祉の職場・職種体験を積み重ねていきます。それらの体験が、福祉問題発見のための認識の深化や、人間と関わることについての感受性の錬磨、さらには自己を見つめることへとつながります。

地域へのメッセージ～手話サークル～

特色GPによるプロジェクトの展開
～さらなる福祉教育の充実へむけて～

パワーアップする教員

教員の教育力の増強のために、教員は全国レベルの研修会に積極的に参加するとともに、その成果を学内研究会に還元したほか、「社会福祉学部総合研究プロジェクト」における福祉教育に関する調査研究を継続発展中です。そして、それらの成果を学生にフィードバックするために、今年度は『ソーシャルワークと権利擁護』『大学生のためのボランティア活動ハンドブック』『大学生のための手話ハンドブック～心をつなぐコミュニケーション～』『視覚障がいと点字の世界～心をつなぐコミュニケーション～』の4冊のサブテキストを作成しました。

4冊のサブテキスト

地域交流スペースYuccaの開設

学生・教職員と地域の人々との交流を深め、地域の教育力と若者のエネルギーを生かし合うことによって生き生きとした地域社会づくりに資するために『山口県立大学　地域交流スペース　Yucca（ユッカ）』を開設しました。

『Yucca』とはメキシコ原産の観葉植物で、未来に向かって力強く伸びる様子から、日本では「青年の樹」と呼ばれています。地域交流スペースが、「青年の樹」のようにたくましく地域に根付いて欲しいという願いを込めて付けられました。『Yucca』では、様々な地域活動を、学生・教職員と地域の人々とともに創りたいと考えています。

地域交流スペースYuccaの開所式準備風景

Yamaguchi　Prefectural　university
creates　community　activities

早速平成19年度事業として「Baby　Café（子育て支援プログラム）」、「Oldies　Café（異世代交流プログラム）」「いきいきヘルシースポーツ塾（介護予防事業）」などを開催しました。

平成20年度はさらに、子育ての悩みを臨床心理士とともに話し合う「子育てピアカウンセリング　Yucca」や大学生による高校生のためのボランティア講座「はーとボランティア講座」、コミュニティ・メンタルヘルス活動「Yucca里楽巣」、Yuccaにある点字プリンターを活用して公共施設のパンフレットや街のレストランのメニューの点訳や、小中学校の点字教室などのお手伝いをする「点字サークル　プチポアン」、さらに筋力のない高齢者や視覚障害者もサイクリングを楽しめる二人乗り自転車タンデムを利用するサイクリング・クラブなど、多彩なプログラムを企画しています。

老人クラブの皆さんとお餅つき（異世代交流）

Baby Café風景

拠点施設実習システム構築へ向けて

平成19年度は、交流体験の巡回指導体制を充実し、現場実習指導者の研修会を実施しました。

福祉現場における実習指導の充実を諮るために、「拠点施設実習システム」構築に向けて、着々と進行しています。

Oldies Café風景
（地域の人々と学生がともにニュー・スポーツ）

やまぐち多世代交流・地域共生授業の展開

～山口市の都市部と田園部におけるワークショップ型授業による団塊世代と若者の定住促進～

現代GP（地域の活性化・地元型）2007年度の取り組みの紹介

＜1＞地域住民と県立大学学生・教職員の間の人間的信頼関係の確立。
＜2＞地域および大学側それぞれの自主的な取り組みを連携させる。

1.「地域が教科書・地元が先生」の理念追究と実践の双方を深めていく

A. 地域との係わりを学ぶにあたりその根幹に「人間的信頼関係」をおくための準備と地域共生授業の実施

- 教科書「フィールドワーク実践ハンドブック――調査被害を考える」の編集・印刷
- 「地域が教科書・地元が先生」の哲学が生まれた地域研究の現場への取材・記録作成
- 次年度地域共生授業の実施へむけた現地打ち合わせ（1-2年生、3-4年生、大学院用授業）
- フィールドワークの巨人・國分直一氏旧蔵書・フィールドノート整理とデータベース化
- 地域共生授業で地域の祭りへの参加をもとめられるなど、多くの出番を体験できた。

B. 学部生・大学院生と担当教員が、地域での存在感ある活動に触れて力をつける

- 大学院担当教員の地域貢献活動と地域における教育研究活動促進のためのFD（研修）
- やまぐち地域再生フォーラムを開催して、地域作りに果たす大学院の役割について討論
- 地域で活躍するリーダーを非常勤講師に招聘することで授業を活性化（学部・大学院）

C. 輝きのある地域の実情に触れて、学生・教職員と地域の相互交流が促進される

- 学生と地域の人たちが図書館づくりの先進地島根を視察（図書館情報学授業）
- 1年生150人が授業で石見銀山を訪ねる（生活文化論授業）
- 留学生による山口文学散歩と地域住民との交流（山口文化論・英語授業）

2.「あってよかった」から「なくてはならぬ」と地域で頼りにされる大学へ

D. 露出度をたかめ「地道だが地味な大学」の評価を脱却するための取り組み

①「現代GP　地域の活性化・地元型」の名に恥じないよう山口市と山口県立大学の連携を具体化する

地域づくり達人塾も順調に広がりつつある

- 達人塾1。山口市徳地地区住民と周防大島・奈良市住民とのスロー・ツーリズム交流への支援
- 達人塾2。図書館づくりを考えるNPOとともに、山口市秋穂に学生が通う。
- 達人塾3。市民ディレクターのNPOとの共同で、ドキュメンタリー映画作り勉強会
- 達人塾4。山口市中心商店街「荒高商店街」への地域コーディネータ派遣
- 達人塾5。山口県環境保全型農業推進研究会などのスローフードネットワークづくり支援
- 達人塾6。宮野のマロニエの森の会と学生が大学内の森林を整備して自然公園に

山口市との提携の着実な進展を通して、現代ＧＰ以降をみすえる

- 山口市地域再生計画の目標。卒業後も地域に係わる学生10人以上、地域作り塾生80人程度
- 現代GP採択をきっかけにして、山口市と県立大学との包括的連携協定調印（2008年2月）

②やまぐちの地を出て他流試合する経験をつみ日常的情報発信を習慣づけていく

- 横浜での大学GPフォーラムで、活動内容をポスター展示して積極的に交流
- 次年度以降の地域共生授業のドキュメンタリー映画づくりのための諸準備
- ブログサーバーを設置して多言語対応ホームページを教員とGPで30サイト開設

E. 地域住民向けの魅力あるパンフ類の作成と直接に地域住民にうったえる公演などの支援

①山口市徳地地区における行政と地域住民と大学をまきこんだ活動の情報発信

- 徳地からの食についての委託研究の成果を地域にも親しみやすいパンフレットとして印刷
- 地域の月刊広報誌のコンテンツづくりに学生が参加（徳地づくり達人塾関連）
- 山口市徳地・島地の地域のお宝（地域資源）マップ。徳地では3つ目となるとりくみ。

②実践的教育の成果を地域へむけて展示・公演

- 修士研究によって復元された鷺流狂言の作品を、保存会とともに地域に発表する公演
- 伝統的地場産業に取材した文化創造の修士製作の発表会への支援
- 田舎や農業に着想を得たルーラルファッションショーの開催。日本農業新聞で紹介される

③学生が地域の国際化をめざして情報発信

- 留学生が個人的に大好きなスポットの多言語による山口市地図「パシャパシャ山口」
- 学生がつくる「韓国ジャーナル」の創刊による地域の国際化への貢献

F. 高大連携による教育実践の段階的充実

- 提携している野田学園高校と女みこしで町内会のまつりを活性化
- 高大連携授業を、提携高校以外にも拡大して英語による授業などを実施して好評

さまざまな取り組みの現場から（A.～F.は左図に対応）

A. やまぐちの地域研究者のノート整理

B. 大阪市立大との交流で地域貢献の討論

C. 留学生が授業で山口文学散歩

D. 山口市秋穂で新図書館を考える

D. 横浜フォーラムで他大学と交流

おしゃれで機能的

山口県立大が農作業着開発

アグリファッションを身に付ける研究会のメンバー（山口市の山口県立大学で）

E. ルーラルファッション（日本農業新聞）

E. 鷺流狂言の公演

F. 高大連携で女みこしかつぎの授業

来年度の計画から

＜1＞地域共生授業を題材にしたドキュメンタリー映画づくりを地域・学生と共同で開始。

＜2＞山口市との包括的連携協定（2008年2月調印）によって地域再生計画を具体化。

現代GP

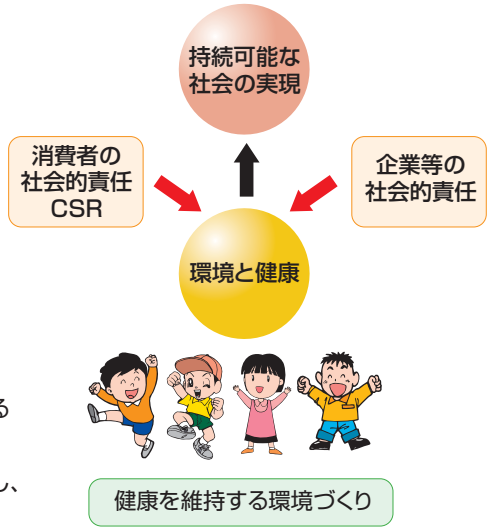
持続可能な社会に繋がる人的財産の育成

～新生活スタートから持続可能な生活基盤づくりを支援する実践的環境・健康教育～

未来からの預かりもの…地球

将来の世代の利益を損なうことなく発展する「持続可能な社会」の構築のために

1.企業の社会的責任、
2.消費者の社会的責任
について双方の重要性を考え、自ら行動できる
そんな人材育成が大学の社会的責任である、と考えます。

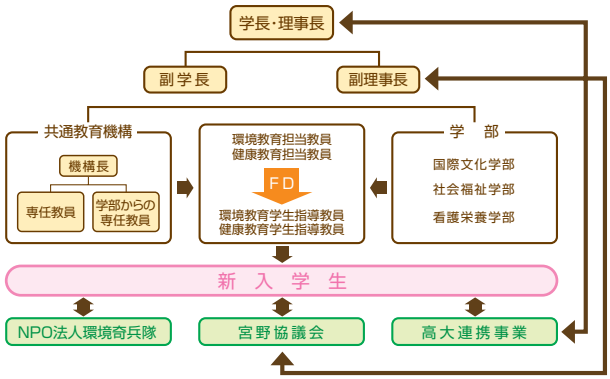


山口県立大学は、全国の大学におけるエコアクション21(EA21)のトップランナーとして、

1.キャンパスルーキーの生活基盤形成時に、環境と健康を配慮した行動ができるよう、持続可能な実践教育を展開しています。
2.全学部学生に社会的ニーズの高い専門的「環境システム」の学習機会を提供し、**進化するEA21への挑戦**を開始します。

進化する教育プログラム

Plan-Do-Check-Act
継続的発展には欠かせない手法です。



生活基盤の中に環境配慮を浸透させる実践的環境教育

実践的環境教育では、日々のキャンパスライフと環境負荷との関わりを題材に、現状把握を行います。EA21の取組目標や、身近な生活の中で環境負荷軽減に関する課題を設定し、PDCAに則って実践的グループ学習を行います。環境に関する先端的知見は学外より専門家を非常勤講師として招聘し、学生の専門分野（国際、福祉、保健）と環境との関わりの理解を深め、Think globally, Act locallyの本質を理解します。外部評価を取入れ、教育プログラムの継続的進化を可能にしています。

環境に配慮した健康なライフスタイルの確立を可能にする実践的健康教育

実践的健康教育では、キャンパスライフと健康の関わりについて、自己管理のためにライフスキルを学びます。自分の健康度や生活習慣の現状把握をした上で、PDCAに則って実践し、望ましい生活習慣への行動変容を促します。体験を通して健康的なライフスタイルと環境負荷軽減の関係を学ぶことにより、健康と環境の関わりを理解します。健全なライフスタイルの構築を阻む要因については、専門家による公開授業として実施し、自己の生活と密接に関わる問題であることを認識させます。

実践的環境教育と実践的健康教育

社会的ニーズにこたえる副専攻「環境システム」

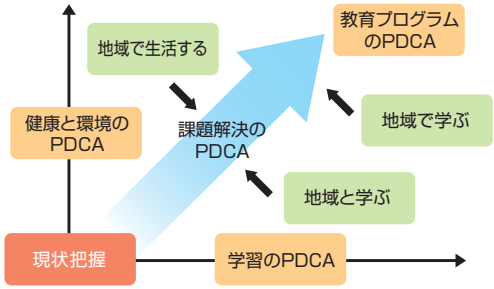
本年度創設を目指している副専攻「環境システム」では、本学で構築しているEMSを教材として活用し、実際のEA21の管理運営、内部監査、環境報告書作成等を通して、EMSの理解や実践的活動、EMS構築支援ができる能力を身につけるカリキュラムを設定します。実践力の強化として、EMSを構築運営している企業等でのインターンシップや環境ボランティア活動も単位化します。この教育課程を通して、すべての業種で必要とされる社会的責任を果たせる人材を育成します。

学生と教員の共進化を可能にする教育プログラム

新しい教育の形へ

専門教員が作成した授業ガイドラインと成果をフィードバックする体制を整備することで、多人数の教員が、共通のテーマで専門外の教育に携わることを可能にする教育方法です。他の授業科目との連携は従来の縦割り授業の弊害と非効率性を解消するものとして注目に値します。透明性・公平性の確保:電子掲示版と授業評価コメントボードの活用により「仲間が見える」、「全体が見える」体制を整備しています。閉鎖系で実施される従来の授業形態では期待できなかった教育効果が得られます。

●学生と教員の共進化促進プログラム



複眼的視野を涵養するために

初年次の生活基盤・思考基盤形成時における多角的視野の涵養の重要性から、学生のグループは約10名の少人数で学部横断的に構成しています。また、約30名のグループ学習指導教員の組合せも学部横断的に構成しています。授業時間外に学外等で展開される学生の活動はグループ指導教員が責任を持って支援しています。

実践的基礎学習能力の習得も

実践的環境教育・実践的健康教育に並行して、情報教育との連携を充実させ、基礎的学習スキルの習得を目指しています。IT活用能力は実践的現場で活用されて初めて身に付くもので、本取組では情報教育の進度に対応した学習課題を出し、IT活用能力を定着させる仕組みを構築しています。

環のキャンパス、大学間交流・・・山口発の学生トレンド

全国の大学を先導する環境活動へ

●「ISO学生会議」全国大会に参加しEA21トップランナーとしての役割を果たします。
●「山口県11大学連携エコキャンパス取組促進協議会」で県内大学をリードします。
●「エコプロダクツ展」に出展し、実践的環境・健康教育の成果を公表します。学生主導でEMSを構築している大学を応援します。

全国の大学間交流が拡大すると同時に、大学を超えた学生間の環境ネットワークが　形成され、全国的な学生トレンドとしての「環境配慮行動」へ発展させよう。

エコプロダクツ2007に出展

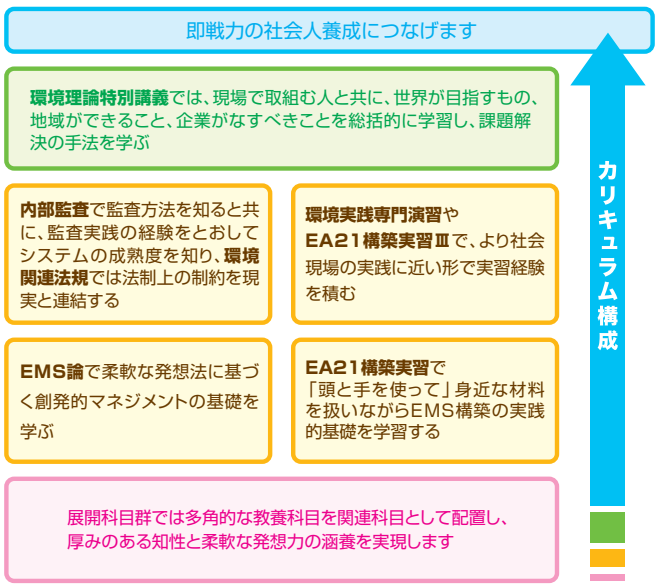
そして、大学の社会的責任として

副専攻「環境システム」の創設は、本学の従来の学部教育で得られる各種資格（社会福祉士、看護師、管理栄養士、教員資格等）に加えて、EMSを理解し、実践することができる人材として大学が認定するためのカリキュラムです。副専攻「環境システム」の修得により得られる資質は、すべての業種において求められるCSRの基盤であり、本学が責任を持って社会に輩出する人的財産です。

[平成20年度開設]

基礎教育と副専攻「環境システム」で継続的な環境教育

多角的な学習を求められる「持続可能な開発のための教育（ESD）」に基づいたカリキュラムを展開するために、以下の構成での授業科目体系を実施します。受講生が、社会人として持続可能な社会システム作りに即応できる**「発想力」、「システム思考と実践力」**を習得することを目的とし、最新のマネジメントシステム手法(シックスシグマ:プロセス改善とプロセス設計／再設計)をベースとした授業科目構成としています。本学が認証取得している**EA21を教材**とし、理論と実践を織り交ぜたスパイラル構造の教育カリキュラムを実現することで、効率よく実践力を培うことができます。また、特別な設備や専門的知識がなくても工夫次第で効果・成果を上げることができるよう、**目に見える実習、対話する講義**を展開します。



総合的人間関係力を涵養する学生支援

～大学と地域で作るプレ社会における実践的トレーニング～

学生支援GPスタート！「様々な活動に参加し、日常生活スキル・対人関係スキルを磨こう」

1 プログラムの概要

本プログラムは、学生が学生生活を通して経験する社会（大学や地域での生活等）を「小さな社会=プレ社会」として捉えて、学生同士は言うまでもなく世代や職種の異なる多くの人々との関わり、体験を通じて自主・自立の精神を養い、総合的人間関係力を身に付けることを狙いとしています。

2 プログラムの意義

このプログラムのメリットとしては、若者に人と関わる経験の質と量の不足が問われる昨今、プログラムを通じて「人と関わる力」が養われ、補われる点にあります。学生は、さまざまな人と関わる体験を通して他者への配慮を持つと共に、生活者として人間関係を円滑に進めるためのスキルを身に付け、社会人としての基盤形成をすることができます。このプログラムは、社会人として生活するために必要な対人関係スキルを学習できる機会を、身近な大学および地域社会を舞台として提供していきます。

3 プログラムの内容

プログラムは、大きく3つの分野に分かれます。①「大学⇔学生」型活動、②「学生⇔学生」型活動、③「地域⇔学生」型活動です。①の活動では、これまで大学内においてゲスト的な立場であった学生に「ジュニアTA」等として大学運営業務に参画してもらい、一部ではあってもホスト側を経験することで、大学の構成員としての自覚形成を促します。②の活動では、学生同士の助け合いと交流を重視し、たとえば上級生から新入生に対しての大学生活をスムーズにスタートさせるための支援、留学生に対する日常生活支援や、自治会・サークル活動など学内の学生活動の活性化を目指します。③では大学周辺の地域を舞台に、地域社会から要請された様々な活動を地域のみなさんと共に進めていくものです。このような活動は新設する「学生活動支援センター」で継続的に募集を行い、学生のみなさんに応募してもらう仕組みとなっています。

4 サポート体制

学生にとっては、活動の内容は理解できたとしても新しい体験には戸惑いもあることでしょう。活動を行うにあたって、学生活動支援センター室員による助言・指導の体制を整えていきます。また、活動内容によっては、有償ボランティア制度を採用しています。高額ではありませんが、活動を通して学びながら補助が受けられるという二重のメリットがあります。

5 活動の実際

19年度は、仕組み作りのために試行的な活動を行いました。20年4月以降は本格実施していきます。活動には本学の学生であることに誇りを持って様々な活動を行えるよう、専用の大学ロゴマークの入ったブルゾン、エプロン、キャップ、地域活動に対してはハッピや提灯、ヘルメット等を貸し出します。

サークル棟「有隣館」の一斉清掃

山口ファミリー・サポート・センター交流会へのボランティア派遣

ジュニアTA:県立大学の森を自然公園にしよう

19年度に行った取り組み例

＜大学⇔学生型の活動＞

■学内イベントのサークル派遣
- ●地域交流スペースYuccaオープニングセレモニー
  幸せの星（手話）、サムルノリサークル派遣（2007年11月）
- ●第4回山口きらら杯マルチリンガル（多言語）スピーチコンテスト
  サムルノリ、フラメンコサークル派遣（2008年1月）

■「ジュニアTA」活動
- ●附属図書館での蔵書点検・整理（2008年2月）
- ●附属郷土文学資料センターでの文学資料の電子テクスト化（2008年2月）
- ●「県立大学の森を自然公園にしよう」活動（2008年2月）
- ●附属地域共生センターでの「やまぐち桜の森カレッジ」運営補助（2008年3月）
- ●卒業式運営補助（2008年3月）

ジュニアTA:附属図書館での蔵書点検・整理

＜学生⇔学生型の活動＞

■サークル棟「有隣館」の一斉清掃（2007年10月）

■日本人と留学生の交流会の定期的開催
（2007年11月、12月、2008年1月）

■ピアカウンセリングのための活動グループの結成、
養成講座開催（2007年10月～2008年3月）

■YPUドリームアドベンチャープロジェクト報告会開催
（2008年2月）

■新入生のための生活マップ作り（2008年2～3月）

YPUドリームアドベンチャープロジェクト報告会（えこチャリ）

＜地域⇔学生型の活動＞

■地域フェスティバル等への学生派遣
- ●白石フェスティバル（山口市白石地区）への学生ボランティア、
  吹奏楽団 BLAZEの派遣（2007年11月）
- ●山口ファミリー・サポート・センター交流会への
  ボランティア派遣（2008年2月）

■宮野地域住民代表との懇談会（2008年1月）

■「ジュニアTA」活動
- ●宮野地域交流ステーションでの受験生案内所開設（2008年2月、3月）
- ●大学周辺・学内環境美化活動（2008年3月）
- ●音楽舞踊劇「マルガサリ版桃太郎」学生運営スタッフ（2008年3月）
- ●鷺流狂言「春の日舞台」学生運営スタッフ（2008年3月）

白石フェスティバルでの吹奏楽団「BLAZE」の演奏

附属図書館学生スタッフの声

■（国際文化学部　文化創造学科　S・Kさん）

蔵書点検とハンディターミナルでの読みとりを行いました。大きな本を読みとる作業等、体力を使う仕事ばかりだったので驚きました。丁寧に本を取り扱うことを心がけました。書庫の中には山口の歴史に関する書物がたくさんあり、興味をそそられました。書庫の管理という図書館スタッフの仕事は知らなかったので勉強になりました。

■（国際文化学部　国際文化学科　H・Mさん）

ハンディターミナルを使って蔵書点検をしたり、不明図書を探したりしました。目録を整理する人や資料の装備をする人もいて、今までは実際に見ることができなかった図書館の仕事を見ることができ面白いです。

日本人と留学生の交流会
～各国料理を通して交流しよう～

地域と大学が共に育つ専門的学習機会の提供

～行動変容を促進する栄養指導法を身に付ける栄養士キャリアアップ支援プログラムの開発～

地域共生センターがつなぐ

山口県立大学附属地域共生センターは、大学と地域の共生を実現するため、平成17年4月に設置されました。「産学公連携推進部門」「生涯学習部門」「高齢部門」の三部門から成り、本学の教育、研究機能を活用して、それぞれ、共同研究・受託研究の推進や共に育つ生涯学習機会の充実、心豊かな高齢社会づくり・生涯現役社会づくり等を、地域と大学のインターフェイスとなって進めています。

生涯学習部門の役割と事業の組立て

特に生涯学習部門では、地域の社会人も高校生にとっても、最も身近でいつでも必要な時に必要な学習が出来る、専門的体系的生涯学習の拠点となることを目指しています。

多様な学習ニーズに応えるために、「生涯学習基礎コース」「生涯学習発展コース」「キャリアアップコース」の三つのステップを設け「山口県立大学オープンカレッジ」を組立てて、学習機会の充実を図っています。**(図1参照)**

図1　山口県立大学オープンカレッジ

生涯学習基礎コース

公開講演会	公開授業	公開講座
客員教授の特別講義等を公開 ・客員教授特別講義 ・開学記念日公開講演会等	大学の授業を公開 ・大学の授業を学生と共に受講 ・基礎・教養科目の一部を公開	県内の市町と共催して行う出前講座 ・大学の教育研究の成果を地域に還元する ・各学部、大学院、郷土文学資料センターが各々1講座を提供 ・生活密着型の教養講座（5～6回シリーズ） ・県内を巡回して実施する

➡

生涯学習発展コース

やまぐち桜の森カレッジ	サテライトカレッジ
生活や仕事、地域活動等における課題解決型専門講座 ・ゼミナール形式で実施（3～6ヶ月） ・大学キャンパス内で実施	県内の市町にサテライトして行う参加型専門講座 ・ゼミナール形式で実施（6～10回） **プレサテライト講座** 県内の市町にサテライトして行うミニ講座

➡

キャリアアップコース

キャリアアップ研修

看護職、社会福祉職、栄養職、教育職等のキャリアアップ研修

・現職者のスキルアップ、職場復帰のための再教育、資格取得の支援などを目指した研修を実施
・ゼミナール形式で実施
・大学キャンパス内で実施

この事業に至った経緯

「山口県立大学オープンカレッジ」の構想は、平成16年11月に実施した「山口県立大学の地域貢献の在り方に関する調査」の結果をもとに組み立てたもので、平成17年度から、本格的事業化に取り組みました。

先ず、生涯学習基礎コースの充実、続いて、生涯学習発展コースの「やまぐち桜の森カレッジ」の開設、サテライトカレッジの拡充を行いました。

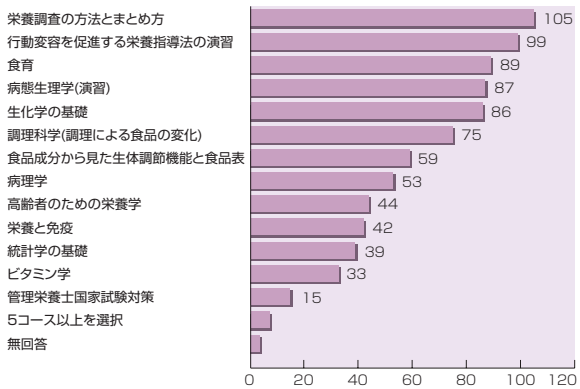
現在、三段目のステップ「キャリアアップコース」の事業を鋭意立ち上げているところです。

栄養職者のキャリアアップについては、平成18年12月にニーズ調査を行いました。**(図2参照)** この結果に沿って今年度研修の実施に踏み切ったのが、この事業です。

この度、この事業が、文部科学省より社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業として委託されることとなり、関係者一同、この事業の意義が認められたことを喜びとすると共に、よりよい事業実施に向けて努力する所存です。なお、その概要は次ページのとおりです。

地域共生センター外観

図2 山口県立大学のキャリアアップ研修で参加したいコース
〈現在栄養士の人〉



栄養士キャリアアップ研修を実施「生活習慣改善指導士」を認定

「メタボリックシンドロームの考え方に基づく保健指導」をテーマに栄養士キャリアアップ研修を6月～12月にかけて6ヶ月間にわたって実施しました。

研修は1回の講義と3回の演習からなるベーシック・コースと、ベーシック・コースの履修に加えて、「YPUすこやかライフセミナー」をフィールドにして7回の実習を行うアドバンスト・コースの2つのコースを開講し、保健医療機関、学校、事業所、自治体などに勤務する現職の管理栄養士の方々が参加しました。

ベーシック・コースは31人が受講し、そのうち11人がアドバンスト・コースを受講し、10人がコースを修了しました。さらに9人の方が修了後ケース・レポートを提出して「生活習慣改善指導士」の認定をうけました。

椅子に座って気軽に運動

グループでの学習会

メタボ退治の目標達成を誓い合う

アドバンスト・コース修了式

身体計測の実習

研修内容

研修では、まず、メタボリックシンドロームの病態と診断基準、治療が必要な理由、治療の原則と方法の概要について講義し、続いて、栄養指導対象者の階層化と適切な栄養指導法（情報提供、動機づけ支援、積極的支援）、体重（体脂肪）コントロールのための認知行動療法について講義をしました。

「YPUすこやかライフセミナー」では、身体活動を高める工夫、食生活の工夫、ストレスとの付き合い方などをテーマに行われる少人数のグループによる学習会の司会と運営について実習しました。実習では、対象者の問題点を指摘するのではなく、対象者自身が気づき、生活習慣の改善と各種測定値の変化の関係を理解することを促す支援方法を身につけることに重点を置きました。

演習のテーマは「調査と介入結果のまとめ方」とし、調査・検査結果と行動変容の関連性を分析しました。介入結果を評価する方法を、実際にコンピュータを操作しながら学習し、その成果発表会を行いました。

「すこやかライフ」でメタボを退治

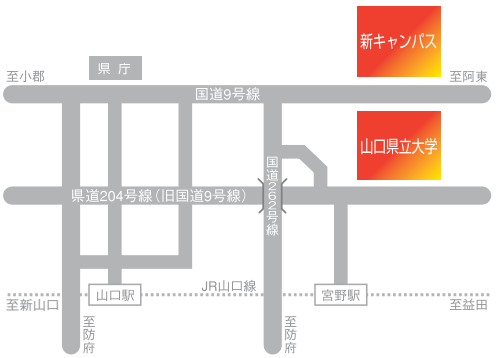
メタボリックシンドロームが気になっている地域住民を対象にした「すこやかライフセミナー」に山口市在住の26人（男性9人、女性17人）が参加登録して7月～12月にかけて6か月間にわたり実施し、24人の方がセミナーを修了しました。

このセミナーは従来の知識伝達型の健康教室とは異なり、身体計測、血液検査、栄養と運動の調査の結果に基づいて、セミナー参加者自らが自身の体の状態、生活習慣の問題点を認識し、それに基づいて自分で行動目標を決めて、6ヶ月間にわたり生活習慣の改善に取り組むというものです。そのための使いやすい栄養調査表、身体活動調査表、自己記録表などを独自に開発しました。

セミナーでは定期的に開催されるグループ学習会を通して、食生活・運動の工夫やストレスを乗り越えるスキルを学び、さらに励まし合うことにより連帯感を強めました。望ましい生活習慣がセミナー修了後も継続するよう、対象者一人ひとりの取り組み状況を把握し、郵送により個別にコメントを送るなど支援方法の工夫をしました。

その結果、3か月の時点で平均約2kgの体重減少を達成し、6か月の時点まで維持できました。開始時には参加者24人中9人の方がメタボリックシンドロームまたはその予備軍に該当していましたが、6か月の時点では7人に減少し、2人の方がメタボから離脱できました。現在は、セミナーで身につけた望ましい生活習慣を、さらに確実なものにしていくために、定期的にセミナー参加者の同窓会を開くことを計画しています。

- 広島・福岡方面から、新幹線新山口駅下車／車で35分（バス40分）
- 益田方面及び新山口方面から、JR山口線宮野駅下車／徒歩3分
- 山口宇部空港より車で80分



公立大学法人
山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

〒753-8502　山口県山口市桜畠3丁目2番1号
Tel.083-928-0211　Fax.083-928-2251
http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/

PRINTED WITH SOY INK